

# Rosby 教授の思い出

毛利圭太郎\*

さる8月19日 Rosby 教授がなくなった。ストックホルムの国際気象研究所で講義中気分がわるくなり、急いで車で病院にかけつけたが心臓麻痺でそのままなくなったということである。1898年12月28日の生れであるから満58才、平均年齢68才のスウェーデン人としては早い方である。われわれは真に偉大な気象学者を失った。Look誌

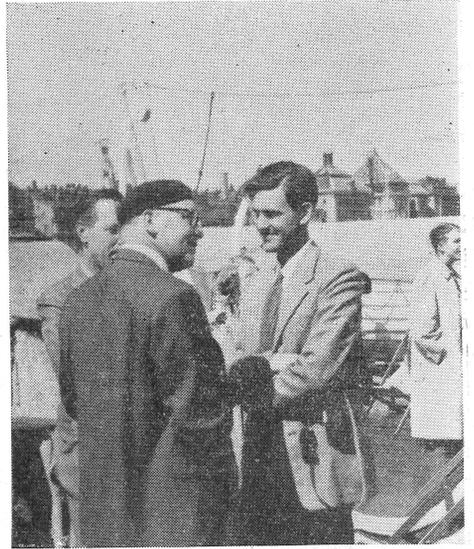


で世界で100人の偉大な人の中にえらばれ、週間誌 Time (1956年12月17日号) に写真と詳しい伝記がのり、またアメリカ気象学会 (1957年1月30日) で「傑出した功績賞」を受けたのがついこの間だったので、人の世の無常をひしひしと身にせまって感ぜざるをえない。

Rosby 教授の業績の紹介は、直接会って話をされた和達長官はじめ、畠山、荒川、正野諸博士に御願ひし、ここでは編輯部の依頼により主としてストックホルムで指導を受けた1年間の思い出をつづって、故人となった偉大な気象学者をしのぶことにする。

地球物理学文献抄 (51年3月) の荒川博士の紹介および Time の記事によると、Carl-Gustaf Rosby はストックホルムで建築技師の長男として生れた。ストックホルム大学で物理を勉強、在学中にベルゲン (ノールウェー) およびライブチッヒに留学。1925年ストックホルム大学理論物理学科を卒業。1年間気象台につとめ、1926年渡米。アメリカ気象局勤務。カルフォルニアで航空気象に従事。1928年招かれて MIT (マサチューセッツ工業大学) の気象学教授となり1939年まで在職した。1929

年 Harriet Alexander と結婚。また Kenyon College から Hon. D. Sc. を受けた。Willett と共にセスナ機で気象観測を行ったり、ロスビー波で知られる長波の理論を発表したのはこの MIT 時代である。1939年アメリカ市民となる。1939年から1941年までアメリカ気象局の



副局長。1942年空軍顧問。1943年いらいシカゴ大学の気象学教授となった。シカゴ大学では Andrew MacLeish. Distinguished Service Professorship という数少ない名誉教授の地位にあつて、物理の Fermi、化学の Urey、天文の Chandrasekhar などと同格であつた。有名な大気大循環の研究が発表されたのは1947年である。1947年ごろから故国ストックホルム大学の気象学教授を兼務するようになり、ストックホルムにヨーロッパ気象学の再建をめざして国際気象研究所を創設し、雑誌 Tellus を創刊した。1951年からストックホルム大学専任になりシカゴ大学は客員教授となつた。そしてストックホルムに家族とともに移り住んだ。そのごは毎年2ないし3ヶ月アメリカに渡り、全般的な研究指導を行っていた。

Rosby 教授に私が始めて会つたのは、1952年の1月シカゴ大学の気象学教室であつた。前年の9月いらい、私は Rosby 教授が1日も早くシカゴに来るのを待っていた。“I am Rosby.” 先生はそういって軽く頭を下げ、て手をさしだした。その手を握ったとき私の心は感激で

\* 気象庁予報課

ふるえていた。物腰ひくくあいそよく、背は5尺8~9寸であろうか、ガッチリとした先生をみて、これがあの有名な Rossby 教授かと思ひその意外にも親しみぶかひのに驚ろいた。

約1カ月気象力学の講義ののちプリンストンを経て先生はスウェーデンに帰って行った。シカゴ滞在中時々話をする機会があったが、いつも先生は忙がしうであった。

私がおスウェーデンに行くことになり、船でゴータベルグに着いたのはその年の9月6日であったが、もううすら寒く、駅頭でも英語があまり通ぜず、車窓からみる紅葉は内地の11月を思わせる状態ですっかり心細くなってしまった。その夕方ストックホルム駅頭で Rossby 先生に再会した時は思わず眼頭が熱くなった。その夜先生のお宅で Newton 夫妻とともにいろいろと話を聞いたときのことは今でも忘れることができない。「君は何を勉強したいか?」「先生に理論を教えていただきたい」と答えたとき、先生はじーっと考えていたが、つぎのようにいった。「シカゴで Yeh (葉) が君と同じようなことをいった。そこで理論を勉強しなければ、まず synoptic を勉強しなさい」といったところ、Yeh ははじめ synoptic を勉強し、またハワイに行ったりして仕事をした。そのあと理論の方面で立派な研究を行った。君もここでは synoptic を勉強しなさい。理論気象と総観気象とは車の両輪のようなものでどちらがおくなくても気象学は進歩しない。」この言葉に従って私は翌日から synoptic の勉強をはじめた。

Rossby 先生は毎朝研究所にくると、皆の集っているところに顔をだし「Children, good morning!」とあいさつした。このことばで皆は元気をだし、各自何か研究していることについて話をすると、「Good! Good!」と行ってまた部屋に帰って行くのが通例であった。昼食時は階下の食堂で一同集って食事をした。有名な気象学者が来たような時は、先生を中心に雑談やらむづかしい議論の花がさいた。驚いたのは Rossby 先生の語学の達者なことで、話が少しこみいってくると、ドイツ人にはド

イツ語で、フランス人にはフランス語できわめてスムーズに話しかけた。こんな時いつも語学の必要性を痛感させられた。

Rossby 教授はある意味で超人的であった。睡眠時間は4~5時間、酒類はきわめて強く、パイプを始終くわえ、ほとんど休むことなく、出て行ったり帰って来たり、大きな声で議論を行ったりして活動をつづけていた。机の上には全世界から沢山の手紙がとどき、Rossby 教授から返事をもらうことは奇蹟だといわれるぐらい忙しい日常であった。あんなに忙しくては元気な先生も体力を消耗せざるをえなかったのではなからうか。

クリスマスの晩のことも忘れられぬことの一つである。招かれて午後3時頃自宅をたづねるとパーティの準備ができるまで散歩しようといい、次男の Hans 君と3人で old town (旧市街)の方へ歩いて行った。Old town では湖畔の古城のほとりにでた。もう日はくれて大きな壁がそそり立っていた。その一角で Rossby 先生は立ちどまり前にひろがる湖水の方をじっとみつめていた。向う岸の点々とした灯が水に反映し、もの静かな冬の夜である。しばらくして先生は私にいった。「私は少年のころよく1人でここにきてこの景色をみるのが好きだった。この湖水はやがてバルト海に拡がり、それは広い大西洋に通じ、その向うにはアメリカがある。いつかはこの湖から船に乗って、昔、多くの人が渡って行ったように大西洋を渡りたいと思っていた。」くらい城壁、静かな湖水、私は若かりし日のノスタルジヤを聞き、忘れることのできない感慨にうたれた。

Rossby 先生はピアノが上手で、また歌が好きだった。奥さんとの結婚ロマンスについては Time 誌にくわしくのっている。長男 Stig (26才)はずっとアメリカにあって物理の大学院学生、次男 Hans (20才)はスウェーデンにあって大学生、長女 Carin (17才)は高校生である。

色々の思い出が走馬燈のようにかけめぐる。帰国してすでに4年、時々手紙をいただいて激励を受けた Rossby 先生今やなし。真に断腸の思いである。

## 新刊書紹介

### 日本の冷害

奥田 穰 編 東洋経済新報社 1957年10月16日刊  
A5判 230頁, 450円

渡辺次雄氏、渡辺和夫氏、荒井隆夫氏、奥田穰氏が執筆し、奥田氏が編集したもので、内容は冷害の実相、要因と形態、凶冷史、冷害の関連した農業技術、気象学を取り上げ、最後に冷害をなくすための意見を述べてある。

一言にして言えば冷害に関する総合書であるが、通り一遍の本ではなく、数年の歳月を費しただけあって、あらゆる面に周到な注意が払われている。

冷害の原因は自然現象に違いないが、著者の云うように社会面から考えなければならぬことが沢山ある。気象学者がこの点に注目して、凶冷の社会的背景や、歴史と取組んで、このような組織的な本を書かれたことに敬意を表する。この本の特徴は、自然科学に通じた著者が、あらゆる面から冷害をとり上げている点で、今までにない深みのある本だと思う。

冷害は東北地方以北に限られた現象であるが、これを解決するには全国民の理解と協力が必要である。章によっては何となく固い感じがするが、それは術語のせいらしく、残念に思われる。

(有住直介)